

# ネパール農業事情

専任研究員 斎藤 勝雄

カトマンズ在住の友人に、「この間インドの国境の町に行ったら、農家のおじさんが、「うちはサイが圃場を荒らして困っている。保護獣なので殺すわけにもいかないし」と言っていたけど、遊びに来ないかい」との誘いに乗って夫婦でのこのこ出かけた。

三年前にはソロモン諸島で土地の所有概念のない人々との新鮮な出会いを楽しみ、そろそろ海外遠征の虫がざわめきたす頃。ソロモンでは農地の所有に関してカルチャーショックを受けた。そこでは土地の所有意識が無い代わりに、バナナとかパイヤと言った木には、それぞれ所有権があり、農家のおばあちゃんに「おまえさんはバナナの木を持っているかい？」と聞かれて、持っていないと応えたら「貧乏なんだねー」と同情されたのには参った。

友人に全てのスケジュールを任せましたが、結局一五日間ヒマラヤに沿ってネパールを縦断し、南部のタライ平原で過ごしてきた。ネパール滞在はちょうど雨期が終わって、晴天が続きお祭りのシーズン、八百万の神々を信仰するヒンズー教徒の多い国だけに至るところでその地方ごとのお祭りを祝って、額にティカというお米を食紅で赤く染めたものをつけて、晴れ着を着た女性を多く見ることが出来た。このお祭りが終わると主食の米の収穫にはいるとのこと、品種によって少し差はあるが、乾いた圃場では米が色づいて穂をたれていた。

## 米の収穫

今年は、モンスーンによる大雨の被害もなくて、ますますの

収穫が見込まれるとのこと、気の早い連中は手刈りでの収穫を終えて、裏作の麦の播種のために水牛で畑起こしを始めているところもあった。耕起作業は牛二頭を頸木でつないで鋤を用いて一五cmくらいの深度であらうか。三〇cmの幅を耕す。用いる牛は大半が水牛で、甘くておいしいミルクティー（ネパールティーと言うとこれをさす）に使うミルクは水牛の乳である。飲んだ感じ少し水っぽいがまあまあいける。

収穫作業は一言で言えば人界作戦、春に日本よりも倍くらいの本数の苗を田植えたものを、稲刈り鎌で手刈り、幾束かをまとめて結束するがそのまま圃場に放置して乾燥させる。脱穀は大半が圃場で、束ねた稲束を簀の子状の板に二〇回ほどぶつけて行う。圃場からの搬出は粉を四〇kg程はいる袋に詰めて行く、このまま商品として売られる。自家用は家に設置されている貯蔵庫に堆積する。稲わらは屋根を葺いたり、牛の寝藁兼飼料として有効に利用されている。

圃場の所々に「ウオッチタワー」と言って丸太で組んだ簡単な棟が立っているが、これは乾燥のために圃場に残した稲を動物の食害から見張る為のもので、夜は監視小屋になる。

近寄って米を観察すると、基本的には長粒種で細くて長い。炊いてもパラパラのタイ米に近い熱帯系の品種である。品種改良も行っているが、稲ワラ利用の関係もあるのか長粒品種で、地域ごとに三から四品種の作付けが行われている。収量はばらつきがあるが、四から五俵程度と思われる。農家にとって米の販売は唯一の現金収入源で、これによって衣類そして、岩塩等の生活必需品の購入に向けられる。

## 食事「ダルバート」にひん

カトマンズ市内の市場では豆腐を売っているのも見かけた。米の裏作で大豆を作っている農家も結構見かけた。ネパールの人々の常食は「ダルバート」と呼ばれ、米を炊いたものに野菜鶏肉、そして豆のカレースープをかけて食べる。ダルというのは豆の事で何はなくともこの豆をすりつぶしたカレー味のスープがついてくる。毎日毎食これでもか鶏肉や水牛の肉は贅沢品で滅多にでない。ちなみに豚肉はヒンズー教の関係で出てこない。食物の保存が利かず暖かいところなので、インドと同じように香辛料で腐敗を防止した文化の北限なのであろうが、日本食が正直恋しくなる。

## ネパールの地域特性・気候・土壌

耕して天に至るとはまさにネパール農業を象徴する言葉ではないか。トレッキングで呼吸を乱しながら三、四時間上り詰めて尾根を回り込むと、その上にまた棚田が広がっている。それが富士山と同じくらいの高度のところと来ている。何千年の昔から維持されてきたのか、石を組んだ通い道、そして畦畔の管理に費やされたであろう情熱とエネルギーに感心するばかりである。

耕作限界とはなんだろうと、改めて感じた。北海道でも離農、高齢化の進展によって耕作放棄地が顕著になりつつある。美瑛の美しい丘の写真を取りに行っても、条件の厳しい頂上のほうが床屋にしばらく行かなかった坊主のようにポヤポヤになっ



ているのは何とも情けなく、これがどんどん広がっては被写体としての価値は無くなる。

人間は与えられる情報によって、自分の運命までをも変える。耕作放棄をせざるを得なかった事情、その地を去って人々はどんな人生を歩んでいるのだろうか。一方でネパールのように限られた情報と、いまだに残るカースト制度の制約の元で、自給自足の経営とはいえない農業を営々と営んでいる農家。子供達の明るい笑顔を見ているとますます複雑な心境になった。

ヒマラヤ山麓（ネパールの約七割がこれにあたる）にはこのような山間部農業が展開されているが、一方でインドバングラデッシュに接する南部タライ平野は、湿地を伴った広大な平野が広がっている。ここには山間部から移住してきて入植した人々もいる。この地帯は肥沃で経営規模も大きく、中には元英国領の関係もあるのか、マッセイファーターガソンのトラクターを駆使した農業経営も見られる。日本のジャイカのような形で英国のプロジェクトが農業振興の一環で持ち込んだものもあるとのこと。

関心があって色々な地域で聞いたが経営面積はそれぞれ数アールから三〇畝まで様々である。これは一つには大家族制の故に数家族まとまった状態での所有と考える、そして数千年の歴史の中で農家間での格差が広がったためではないか。

日本と比べるとは適切とはいえないが、昭和初期の稲作経営はこんなものだったのではないかと思われる農村景観であったが、なぜか懐かしいほのぼのとさせられるゆったりした時間を過ごすことが出来た。このままであってほしいと思うのは、無責任な旅行者のエゴかも知れない。

# フィリピンに見る アジアの有機農業

専任研究員 酒井 徹

## ここはアメリカか？

この蒸し暑い国は、まだ十一月だというのにクリスマス・ムードで盛り上がっている。この国の大部分はクリスマスチャンなのだそう。 「フィリピンに行ってくる」と言うと、友人達は「治安の悪さ」を強調して私の不安をかきたてるか、ニヤニヤしながら「何しに行くの？」と聞く。 実は何を隠そう有機農業の視察・調査と国際会議に参加すべくやってきたのであった。

はじめ、移動にはバスを利用しようと思っていたのだが、「それはキケン」とさんざんに脅かされ、結局タクシーで移動したところがこの車は運転がめっほう荒い。おまけに市街地の渋滞と排気ガスもひどい。アメリカの影響かここは車社会である。うちの職場の井上さんに鉄道にちなんだお土産を探したが、鉄道はほとんど走っていない。地元の人達は「ジブニー」という中古ジープを改造した乗り合い自動車を使う。はみ出してぶら下がっている人も珍しくない。一方、日本の中古車も沢山走っている。自分の親父が乗っていた懐かしい車もここではまだ現役である。

食事は、お子さまランチのように皿に盛られた長粒種の御飯を中心に、肉と野菜を煮て簡素に味付けをしたものや、魚の唐揚げなどを食べる。野菜はあまり食べない。わりと大雑把な料理が多く、豚の丸焼きが一番のご馳走である。パパイアやマンゴーなど果物は結構美味しい。はじめのうちは「フィリピン料理」を食べようと思っていたのだが、数日でやめた。街ではマクドナルドや「ジョリー・ビー」とかいう、いかにもアメリカっ



フィリピンのバナナ畑

ほいファースト・フードが幅を利かせている。因みに英語の普及率もアジアで一番だそうだ。

## フィリピンの農業と有機農業

フィリピンの主要農産物は、米、ココナッツ、さとうきび、キャッサバ、豚、果物などである。政府は食糧自給率の低下と貧困に歯止めをかけるために食糧増産を唱えるが、なかなか進まないらしい。高収量品種や化学資材もあまり普及していないと聞く。

そうしたなかでフィリピンの有機農業は、まだ萌芽的で、農家個人やNGOによる取り組み事例が十数件みられる程度である。今回視察したのは、野菜、鶏、養蜂、肥料、乳製品などがある。有機農産物の購買層は、高所得者と外国人の滞在者などが中心で、有機農産物は農家に隣接している直売所や、高所得者や外国人の多い地区の公園で毎週開かれるファーマーズ・マーケットで売られている。ホテルやレストランなどにも入っているらしい。但し、フィリピンに認証制度はなく、中身はよくわからない。

## IFOAMアジア会議

さて、今回のフィリピン訪問は、国際有機農業運動連盟（以下、IFOAM）のアジア会議に参加するのが主目的であった。IFOAMは一九七二年、フランスのベルサイユで結成された有機農業の振興を目的とする民間の国際団体である。現在約一〇〇ヶ国の七〇〇団体が加盟しており、本部・事務局はドイツにある。IFOAMアジア会議はIFOAM会員のうちアジア



有機野菜生産圃場



グリーン・ベルトのオーガニック・マーケット

地域の団体が構成されており、一九九三年から隔年で開催されている。(第一回は日本で開催。)

IFOAMアジア会議の内容は、まず、農場視察ツアーと市街見学ツアーが三日間ほどあり、その後「科学会議」として、各種ワークショップ(研究会)やシンポジウムが三日間の日程で行われ、最後に総会が行われる。また、その期間中、展示・即売や各国の参加者がそれぞれステージで出し物を披露する催しなどが行われる。

今回の第四回フィリピン大会は、日本、中国(香港)、韓国、ネパール、タイ、フィリピン、マレーシア、ベトナム、バングラディッシュ、スリランカ、インド、インドネシアなどから、およそ一五〇名が参加した。今回の大会は、フィリピン開発アカデミーという政府関連施設で行われ、日本と言えばJETRO(日本貿易振興会)のような機関が事務作業を請負い、開会式では通商大臣と農務次官が挨拶するなど、政府による協力を得ているのが特徴的である。このあたりは、中国などと同様に、フィリピンでも有機農業が輸出振興策に位置付けられていることを物語っている。

研究会の内容としては、以前は生産面のテーマが多かったのに対して、今回は、流通面、特に有機農産物の基準・認証に関連するものが多かった。例えば、アジア独自の基準を作るか否か(主に貿易関連業者が要望しているらしい)とか、検査・認証の費用負担を減らす為にどうするか、あるいは既存の流通経路と異なる形態での流通の可能性など。必ずしも各国の代表的な意向を反映しているとは言えないが、参加者の発言から受け



IFOAMアジア会議のワークショップ

る印象としては、中国、スリランカ、インド、タイ、フィリピンなどでは輸出指向が強い。その輸出先としては、植民地時代の元宗主国など欧米が中心だが、厄介なことに、日本も今後の市場として期待されている。輸出品目は、これまで主に茶や米であったが、今後はニンニク・生姜などの香辛料なども輸出したいようだ。商社が品種を持ち込み栽培方法を指定した取引もけっこうあるらしい。このように、アジアで輸出を指向する一方で、日本の産消提携のような形態による国内市場開発にも関心がある。つまり、国内の有機農産物市場が未成熟なので輸出せざるを得ないという面もあるようだ。

今回の大会の最終日に総会が行われ、日本人が代表理事に選出された。経済的支援と国内外の市場開発に対する期待の現れであろう。

## おわりに

IFOAMアジア会議は全部で七日間の日程であった。その前後にJICA（日本国際協力事業団）のマニラ事務所やIRRI（国際稲作研究所）を訪ね、一〇日間を超えるフィリピン滞在となった。その間、御多分に漏れず下痢に苦しみ、情けないことに熱まで出しながらも、なんとか全日程をこなして帰国することが出来た。というわけで、いろんな場面で多くの方々にご助けていただきました。本当にありがとうございました。

尚、詳しい話やちょっとここに書けない話は、二〇〇〇年二月の地域農研月例研究会で報告する予定なので、興味のある方はお問い合わせ。



# 韓国江原道における 『新農漁村建設運動』の取り組み事例

韓日シンポジウム

『中山間地域農業の活性化戦略』に参加して

北海道大学大学院 菅沼 弘生

## はじめに

これは、筆者が去る九月二十七日から十月一日にかけて参加した韓日シンポジウム（北海道農業研究会、江原道大学共催）の内容とそこの印象を紹介するものである。日韓シンポジウムは、農村実態の共同調査を国内同様、国外でも実施・討議する必要があるとの認識から始まった。以来、隔年ごとに双方が相手国を訪問しており、今年は韓国への三回目の訪問、全体としては六回目のシンポジウム開催となった（日本側の参加者は一三名）。これまで一貫してWTO体制下の農業動向を問題としており、それぞれ酪農、活性化戦略、中山間問題、農政問題が取り上げられてきた。今回は、自立実践運動として注目される「新農漁村建設運動」に焦点をあてたシンポジウムを開催し、その背景にある農村の実態調査を実施した。

## 一．シンポジウムの概要

本シンポジウムは江原道（道は日本では県に相当）における地方化時代の「新農漁村建設運動」の進行状況の報告が中心であり、その要点は以下である。総論としては①清浄な自然環境を活かした農産物の差別化・加工食品の開発による付加価値販売の方向、②生産者組織、関係機関、研究機関の三位一体的取り組みの必要性が示され、各論として①個別農家の意識改革、組織化等の主体的側面の重視と地域資源の結合の重要性、②農協による農産物包装センターの設立と一元出荷体制の構築の必要性が指摘された。



日本側の報告は、①北海道中山間地における農地管理システムと作業受委託事業に関する実践事例の提示、②中山間政策における「条件不利」視点の必要性の指摘があり、韓国側にも一つの示唆を与えたといえる。楊口郡（郡は日本の町に相当）で行われた現地シンポジウムでは、韓国側から①農協における流通・加工事業の必要性、②戦略作物である百合生産の取り組み実態が報告され、これに対し日本側から農産物の販売に関する生産部会の機能について北海道の実態が紹介された。

## 二・調査農家の概要

農家調査は五班編成（稲作、韓牛、施設野菜、花卉、原生花）で実施された。特に後三者は中山間地（江原道）の活性化戦略として注目される振興作目である。ここでは原生花農家の部門導入の考え方、販売対応について紹介する。



クロカムチヨロンの花

### （一）調査地の地勢

調査対象農家が位置する江原道・楊口郡東面八朗里（里は日本の集落に相当）は、韓国・北朝鮮の間にまたがる非武装地帯にほど近い集落である。同時に、マタクンクニズゴツ（湿度の多い土地で育つ代表的な食虫植物）やカムカンチヨロン（金剛提灯花あるいは金剛釣り鐘草、写真参照のこと）という非常に珍しい植物の自生地ともなっている。特産物である清浄新米、金剛有精卵、ワラビ、はったい粉むぎこがし、マンネンタケ、ヒラタケ、松茸、桑の葉うどん、蜂蜜などによって示されるように、「自然」・「清浄」がうりものとなっていることに合点がいく。

### （二）原生花農家―朴 燦成さん（四七才）の概要

朴さんは、山に向かって広く広がる三珍あまりの経営規模の中で、花卉、韓牛、および稲作を始めとする耕種部門を取り入れている。経営主の年齢は四七才であり、十一年前に、韓牛を残しながら原生花を導入した。経営の基幹作目は原生花栽培であり、幼年からの原生花に対する興味・親しみが導入のきっかけである。現在では花卉部門が第一の所得源になっており、前述のカムカンチヨロンを目玉商品とし、その他七九種の原生花を栽培し販売している。楊口地域には一、二〇〇種の原生花があるとされ、そのうちの多くの種を保存し、ほとんどの生息地帯を認識しているそうである。

主たる販売先は国内の造園業者と研究機関である。需要は国



韓国名物とうがらしの乾燥



韓国米

内でもかなり増加しており、国外への輸出は考えていないというところがある。これには気温差等に伴う品質の劣化問題も影響している。

### (三) 調査所感

WTOの影響は韓牛への影響が大きいと考えられており、特に中国からの安い牛肉の輸入を特に懸念している。これに対し、原生花はWTOの影響が非常に小さい。立地・技術条件に大きく規定され供給が限定的であること、また遠隔地への輸送が困難であること、などがその要因である。経営主の名刺の肩書は「韓国原生花協会」とあり、原生花農家が個人としてだけでなく群として生き残っていけるような芽がここに有るように感じられた。

### おわりに

このシンポジウムを通して韓国の農村で取り組まれている「新農漁村建設運動」の実態を垣間見ることが出来、大きな成果であった。「新農漁村建設運動」は一九六〇～七〇年代のセマウル運動に続く協同の自立実践運動であり、非常に興味深い。なお、シンポジウムの詳しい内容は、現在編集中の「北海道農業No.26」（北海道農業研究会）で特集の予定である。

シンポジウムでは農業者自身の主体性の問題が特に強調されていた。農家調査を通して、柔軟な発想と高い技術水準を併せ持つ地域農業発展の芽を垣間見た気がする。韓国北部の山里の経験は、地域条件を活かした取り組みとして学ぶべき点が多い。